

「福岡県西方沖地震」から20日で15年 住宅の耐震診断現場に密着 “重い屋根”は被害大の可能性も

死傷者が1000人を超えた福岡県西方沖地震の発生から、20日で15年を迎えます。

全壊した家屋も100棟を超えた地震だったんですが、今改めて注目すべき住宅の耐震診断、その現場に密着しました。

「この梁と柱を抜けないようにしている。こういう金物が適正についているかどうか」

「ここに線がみえますね、蟻の道と書いて蟻道と言うんです」

【記者】

「細い路地が入り組んだ大野城市の住宅街です。この瓦葺きの住宅は昭和50年に建てられ、今年で築45年を迎えます」

「こんにちは」

この住宅で暮らす小金丸幹夫さんです。

耐震診断を受けるきっかけは4年前の熊本地震でした。

【家主 小金丸幹夫さん】

「私の知り合いが熊本地震で奥様が下敷きになりまして、益城でね、助かったんですけど、複雑骨折で長いこと入院されていたんです」

診断にあたるのは白水秀一さん。

福岡市で建築会社を経営していて13年前に、市と協力して「耐震推進協議会」を立ち上げました。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「（耐震）診断も12年ぐらいで1800件くらいやってますけど、一つの大きなきっかけは西方沖地震だったと思う」

2005年、3月20日に発生した福岡県西方沖地震。

死者1人、負傷者1087人、全壊した家屋も133棟に達するなど、福岡市を中心に甚大な被害が出ました。

「壁の位置とか、窓の位置が重要になるので、それを正確に図面の中に入れていく」

見取り図に記入した白水さんは、住宅の外へ

「(壁に) 亀裂が入り雨水が直接家の中に染みこんでいくような状態でないかとか、そういうことのチェックですね」

次に目を向けたのは、住宅の屋根を覆う重い「瓦」でした。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「屋根の重さで耐震性は変わってくるんですね」

白水さんも、熊本地震の被災地を見て回った際に実感したことがあったといいます。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「重い屋根というのは被害も大きくて、2階建ての建物が平屋になってしまう」

「窓が多くて重い屋根でという家がやっぱり被害が大きかったです。新しい家で軽い屋根は逆に被害が少なかったです」

「あの時の経験というのは凄く役立っています」

再び住宅の中に戻った白水さん。

次は、建物の構造や強度を確認するため屋根裏に入っていきます。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「雨漏りがないか…その辺の確認ですね」

「横方向の建物の変形を防止するために火打というんですが、このつかえ棒ですね、ここの接合部のボルトが緩んでないかということを確認している」

その後、居間の畳をはがし始めた白水さん。

耐震診断の中で、最も骨が折れるという床下の点検作業に入りました。

白水さんがまず手にとったのは、住宅の基礎の強度を分析する装置です。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「コンクリートの中に鉄筋が入っているかどうかの調査です」

その後、木材の状態も見ていきます。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「含水率のチェックになります」

「含水率が30%を超えてくると木がじゅくっと湿ってきて、シロアリの被害に遭いやすいと言われています」

この住宅では実際に、シロアリによる被害が確認されました。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「これが蟻道です膨らみがありますけど、(中が)トンネルになってるんです」

「木材の中から食べるものですから、表面的にはなかなか分からない」

その後、この住宅では耐震補強の工事が行われ、震度6強の地震でも倒壊しないレベルにまで耐震性が改善しました。

改修にかかった費用はおよそ230万円。

このうち60万円は大野城市からの補助金を活用しました。

【家主 小金丸幹夫さん】

「もう年が70近いですから、今もし地震で住宅が壊れて、もう一回建て直す気力が自分にはないような気がするんです」

「やっぱり安心感はありますよね」

福岡県内の自治体は耐震補強の工事にそれぞれ補助金を出していますが、その額は30万円から100万円と大きな開きがあります。

【住環境工房らしんばん 白水秀一代表】

「どこに地震がいつ来てもおかしくないので、60市町村、同じような金額を出して頂けるようになればと思いますね」

「震度7の地震が来たら逃げる暇なんてないですから」

「まずは耐震診断をして頂きたい」